

各分類群における主な変更の理由

(1) 種子植物

2011～2015 の5年間の自然環境課の野生動植物生息状況等調査での調査員の活発な活動による情報（延べ800日、1100人、2200件）を基に作成した。また、スゲ類は、30年以上のブランクがあったが、2012年のすげの会全国大会などを通じ黒木秀一氏らの活動により調査が進み、多くのスゲが初確認された。

県内研究者の調査等により学会誌に新種のもろつかウワミズサクラ、ヒュウガヤブレガサ、タカナベカイドウなどが発表された。県内では、宮崎県総合博物館の研究紀要や宮崎植物研究会会誌・通信などの情報も参考にした。県外では、環境省2012や近隣県（大分県2011、熊本県2014）のリスト改訂を参考にした。

現地調査では、日南海岸地域を除き、シカ食害の激甚化で、灌木は皮の食害により枯死し、その影響で高木も衰弱しており、林床の植物はほぼ食い尽くされ、忌避植物のみが見られる状態になっており、ごく普通種だったものも激減しており、いままで絶滅の恐れが無かった一般種まで念入りに再検討した。このままの状態が続けば、2020年のRDB改訂時には絶滅（EX）がかなり増加することが懸念される。

和名、学名は、近年主流になっているAPG分類体系も考慮し、Web上の米倉らのYlistや日本維管束植物目録（邑田・米倉，北隆館2012）を基に抜本的に見直した。

（参考文献）

- 花井隆晃・芹沢俊介，2008. 日本のミゾソバ類. シデコブシ1: 3-26.
齊藤政美，2012. 新種発表されたナベワリ属2種について. 宮崎県総合博物館研究紀要32.
大場秀章・齊藤政美，2012. 九州産ウワミズザクラ属（バラ科）の1新種. 植物研究雑誌87-6.
齊藤政美・福松東一，2012. 高鍋湿原の花暦. 宮崎県総合博物館研究紀要32.
邑田仁・米倉浩司，2012. 日本維管束植物目録. 北隆館. 東京.
南谷忠志，2012. 九州のウミヒルモ類. 宮崎植物研究会誌12: 1-3.
黒木秀一，2012. 九州新産のオオカワズスゲ. 宮崎植物研究会誌12: 36-37.
門田裕一・齊藤政美，2013. 九州産ヤブレガサ属（キク科）の1新種，ヒュウガヤブレガサ. 植物研究雑誌88-6.
角野康郎，2014. 日本の水草. 文一総合出版. 東京.
環境省編，2014. 日本の絶滅のおそれのある野生生物. 植物1（維管束植物）.
渡邊幹男，2014. ナガバノイシモチソウ. 愛知教育大学自然科学系生物領域.
齊藤政美，2014. ホクリクムヨウラン宮崎県に産す. 宮崎県総合博物館研究紀要34.
齊藤政美，2014. 新種ヒュウガヤブレガサについて. 宮崎県総合博物館研究紀要34.
南谷忠志，2014. トヨボタニソバが九州にも出現. 宮崎植物研究会誌13: 4-6.
黒木秀一・河野耕三・須原弘登，2014. 綾の照葉樹林にタカクマソウを確認. 宮崎植物研究会誌13: 23-24.
齊藤政美，2015. チョウセンナニワズについて. 宮崎県総合博物館研究紀要35.

（調査協力者）

- 河野耕三 綾町役場（宮崎植物研究会）
成迫平五郎 宮崎植物研究会（元 聖心ウルスラ学園）
赤木 康 宮崎植物研究会（元 宮崎県総合農業試験場）
齊藤政美 宮崎県総合博物館（宮崎植物研究会）
井上伸之 宮崎県南那珂農林振興局（宮崎植物研究会）
黒木秀一 宮崎県文化財課（宮崎植物研究会）
福松東一 宮崎県総合博物館（宮崎植物研究会）
岩切勝彦 宮崎県総合博物館（宮崎植物研究会）

(2) シダ植物

2011～2015 の5年間の自然環境課の野生動植物生息状況等調査での調査員の活発な活動による情報(延べ300日、450人、500件)を基に作成した。また、2013年からは国立科学博物館のシダ図鑑作成の分布図草案も参考にし、証拠標本収集と併せて県内をまんべんなく調査した。

県内では、宮崎県総合博物館の研究紀要や宮崎植物研究会会誌・通信などでの多くの新情報も参考にした。県外では、環境省2012や近隣県(大分県2011、熊本県2014)のリスト改訂も参考にした。

現地調査では、日南海岸地域を除き、シカ食害の激甚化で、林床の植物はほぼ食い尽くされ、忌避植物のみが見られる状態になっている。岩壁等のシダは生き残っているものもあるが、乾燥化が進行し、湿潤な環境でしか生育できない種は激減している。

和名、学名は、近年主流になっているAPG分類体系も考慮し、Web上の米倉らのYlist・日本維管束植物目録(邑田・米倉、北隆館2012)や、国立科学博物館のシダ図鑑用の索引を基に抜本的に見直した。

(参考文献)

Wataru Shinohara, Tsai-Wen Hsu, Shann-Jye Moore, Ho-Ming Chang and Noriaki Murakami., 2006. *Deparia Longipes* (Woodsiaceae) Native to Taiwan. American Fern Journal 96(3): 96-99.

芹沢俊介, 2009. 日本産シダ植物雑記(5). シデコブシ1: 86-88.

南谷忠志・岡武利, 2012. 日本新産のチャセンシダ科の1種: イノウエトラノオ. 日本シダの会会報第4巻11号.

斉藤政美, 2012. 宮崎県新産シダ2種. 宮崎県総合博物館研究紀要32.

宮崎植物研究会, 2012. 宮崎植物研究会会誌. 第12号.

邑田仁・米倉浩司, 2012. 日本維管束植物目録. 北隆館. 東京.

環境省編, 2014. 日本の絶滅のおそれのある野生生物. 植物1(維管束植物).

南谷忠志・赤木康, 2014. 宮崎県初記録のシダ植物～発見の経緯と現状(1). 宮崎植物研究会誌13: 16-20.

ATSUSHI EBIHARA, NARUMI NAKATO, YUKIKO SAITO, TAKETOSHI OKA, TADASHI MINAMITANI, 2014. New Records of *Asplenium varians* (Aspleniaceae) and Two New Hybrids in Japan. Acta Phytotax. Geobot. 65(2): 53-65.

海老原敦ら, 2012-2015. 国立科学博物館シダ植物分布図草案1-15.

(調査協力者)

南谷忠志 宮崎植物研究会(元 宮崎県総合博物館)

斉藤政美 宮崎県総合博物館(宮崎植物研究会)

井上伸之 宮崎県南那珂農林振興局(宮崎植物研究会)

(3) 蘚苔類

1. 削除

ウキゴケ(*Riccia fluitans*)は、全国の低地に広く生育していることが明らかになり環境省第4次レッドリスト(2012)においてランク外とされたため、リストより削除する。

2. 追加

CR+ENとしてミギワイクビゴケを追加した。加江田溪谷、綾町、尾鈴山の3カ所で生育が確認され、環境省第4次レッドリスト(2012)においてもCR+ENに挙げられている。VUとしてオオタマコモチイトゴケ、マユハケゴケ、オスズホウオウゴケの3種を追加した。オオタマコモチイトゴケは、市房山のほぼ枯死した灌木に着生しているため、灌木の不朽

により消滅するおそれがある。マユハケゴケは白岩山登山道の土手に生育しており、県内では初めて生育が確認された。オスズホウオウゴケ *Fissidens laxitextus* は日本新産として報告された(鈴木・岩月, 2012)。尾鈴山瀑布群の空中湿度の高い半日陰の土手に生育する。日本での生育地は現在のところ1カ所のみである。レイシゴケ、キブリハネゴケは石灰岩地を好む蘚類で長年県内での生育が確認されていなかったが、近年白岩山、柘の谷鍾乳洞から報告された(木口・黒木, 2001、田中, 2012)。環境省第4次レッドリストにおいて準絶滅危惧に挙げられており、県内でも生育場所が限られているため NT として追加した。今回の調査では高千穂町向山においてキブリハネゴケの生育を確認した。リュウキュウナガハシゴケ及び *Trichosteleum stigosum* は猪八重原生林の倒木上に混生しており、*Trichosteleum stigosum* は 2015 年に日本新産として報告された(鈴木, 2015)。国内での生育地は現在のところ1カ所のみである。

3. 修正

2 種の和名について、コモチイトゴケ *Isopterygium propaguliferum* をコモチイチイゴケに修正、フチナシクジャクゴケ *Dendroclyathophorum decolyi* をキダチクジャクゴケに変更する。

(引用文献)

岩月善之助, 2000. 日本の野生植物「コケ」. 平凡社.

鈴木直・岩月善之助, 2012. *Fissidens* (Fissidentaceae, Bryopsida) species newly found in Japan. *Hattoria*3: 1-48.

木口博史・黒木秀一, 2001. 宮崎県石灰岩地の蘚類について. 宮崎県総合博物館研究紀要 22: 127-142.

田中敦司, 2012. 日本の石灰岩性蘚類. *Naturalistae* 16: 47-82.

鈴木直, 2015. *Trichosteleum stigosum* Mitt. Newly found in Japan. *Hattoria*6: 53-55.

(参考文献)

岩月善之助, 1992. 宮崎県のこけ植物. 「宮崎県の生物」編集委員会.

岩月善之助, 1982. 鶴戸の蘚苔類. 日南市文化財調査資料集. 日南市文化財保存調査委員会.

出口博則, 1984. イクビゴケ科蘚類の1新種ミギワイクビゴケ. 植物研究雑誌 vol. 59 no. 4.

水谷正美, 1975. 猪の谷のタイ類とツノゴケ類. ふかのき(日向植物誌) 13: 29-33.

水谷正美, 1985. 宮崎県猪八重溪谷のタイ類とツノゴケ類のリスト. 蘚苔地衣雑報 vol. 9 no. 7.

宮崎県, 2011. 宮崎県の保護上重要な野生生物 2010 年度版. [無維管束植物(蘚苔類)].

環境省, 2012. 第4次レッドリストの公表について. [植物 II (蘚苔類)]. 環境省第4次レッドリスト. http://www.env.go.jp/press/file_view.php?serial=20558&hou_id=15619.

(情報提供)

秋山弘之 兵庫県立人と自然の博物館

南壽敏郎 公益財団法人服部植物研究所理事長

(調査協力者)

赤木 康 宮崎植物研究会(元 宮崎県総合農業試験場)

岩切康二 宮崎植物研究会

河野耕三 綾町照葉樹林文化推進専門監

黒木秀一 宮崎県文化財課(宮崎植物研究会)

斉藤政美 宮崎県総合博物館(宮崎植物研究会)

福松東一 宮崎県総合博物館(宮崎植物研究会)

南谷志忠 宮崎植物研究会(元 宮崎県総合博物館)

八木真紀子 宮崎植物研究会

(4) 淡水産藻類

今回の改訂においては、調査の進んだ車軸藻類のみを対象とした。

県内に分布が記録されているシャジクモ科の淡水産藻類は 17 種ほどあり、これらは、過去の文献と 1990 年と 1999 年の調査結果によるものである。主な文献は（今堀宏三、日本産輪藻類総説、1954）を参照し、さらに 1990 年の南谷忠志採集の標本の同定と 1999 年の須賀瑛文らの現地調査を付加したものである。そのうち、2010 年度版レッドリストでの種数は、13 種である。2015 年度では、3 種を追加し 16 種とした。また、イトシャジクモ、チャボフラスコモは環境区分を修正した。

2010 年度版レッドリストに掲載したミルフラスコモはきれいな溜池に生息するが希な種で、1894 年に都城市で採集されているが現在の生育は不明である。フラスコモダマシは冬期に見られるやや酸性を帯びた溜池や溝に見られ、県内では 1 カ所で確認されているが、現在は不明である。また、セイロンフラスコモについてもここ数年確認できていない。ミノフサフラスコモは、前は 2 カ所で群生が確認されているが、ここ数年確認されていない。しかし、溜池や湿田溝など、未調査部分もあり、絶滅としての判断は難しい。今後も調査を続け、確認していきたい。

イトシャジクモについては、現在 1 カ所の溜池での確認だが、溜池の現状は、貴重な水生植物も見られ大きく環境の変化はないものと思われ、今後も暫くは安定して生育するものと思われる。環境区分が「海岸」とされていたところを「湖沼・人工池（溜池・湖沼等）」に変更した。チャボフラスコモは、水田溝で確認されており、現状は安定している。しかし、生育箇所がわずかであるため、危機に瀕していることには変わらない。水田脇の溝などで確認されているため環境区分を「水田・水路」に変更した。チルフラスコモはここ数年確認していた 2 カ所で確認できなくなった。しかし、1 カ所については安定した生育状況である。

今回、追加種として、ジュズフラスコモ、ヒメフラスコモ、ナガホノフラスコモを挙げた。溜池で確認されているものは、溜池の状況が大きく変わらない限り、数年は確認できているため、ヒメフラスコモとナガホノフラスコモを挙げた。しかし、もともと生育場所が限られており、現在確認しているところの環境が悪化すれば、なくなる可能性は高い。ジュズフラスコモは溜池より湿田脇で見つかることが多いが、翌年も同じように確認されることはあまりない。そのため、非常に危機に瀕している。

シャジクモ藻類の宮崎県区分はこれまでも示されてこなかった。区分を示すだけのデータが得られていないため、維管束植物群のように判断できないためだと思われる。今回も確認した溜池や湿田では、数多くが確認されてはいない。概ね宮崎県で確認された種も環境省区分と同じであると考えられる。

（参考文献）

今堀宏三、1954. 日本産輪藻類総説.

宮崎県、2011. 宮崎県の保護上重要な野生生物 2010 年度版.

廣瀬弘幸・山岸高旺編、1977. 日本淡水藻図鑑. 内田老鶴圃.

（調査協力者）

井上伸之	宮崎県南那珂農林振興局（宮崎植物研究会）
齊藤政美	宮崎県総合博物館（宮崎植物研究会）
南谷忠志	宮崎植物研究会（元 宮崎県総合博物館）

(5) 地衣類

1. 変更

種の大きなランクの変化として前回はフクレヘラゴケが VU とされていた。本種は、環境省 RDB においては NT とされているが、スギ林、照葉樹林、街路樹等に確認され、県内に広く分布していることが分かったため削除とした。

2. 追加

文献による調査結果から、全国で本県のみでの分布、全国で5カ所以内の分布、九州で3カ所以内の分布などをリストアップすると共に、新版環境省 RDB のリストについても検討を行った。なお、今後の調査で広範囲に分布の可能性があるものはリストから外し、希少性が高いと思われる種を残している。その結果、41種を新たに追加した。

2000年以降に確認された日本新産種としてヒュウガザクロゴケ、ザクロゴケモドキ、キリシマカワキノリ、チヂレウチキウメノキゴケ、オオイシガキメゴケ、アヤノニセザクロゴケなどの6種、チヂレフトネゴケなどを追加した、これらは県外からは報告がないものである。

(参考文献)

- 環境省自然動物局野生生物課希少種保全推進室, 2015. レッドデータブック 2014—日本の絶滅の恐れのある野生生物 9 植物Ⅱ. ぎょうせい. 東京.
- 川上寛子・原光二郎・小峰正史・黒木秀一・岩切勝彦・山本好和, 2014. 宮崎県綾町綾南川および綾北川河畔の地衣類. 宮崎県総合博物館研究紀要 (34): 73-81.
- 川上寛子・原光二郎・小峰正史・黒木秀一・山本好和, 2011a. 宮崎県猪八重溪谷の地衣類. 宮崎県総合博物館研究紀要 (31): 41-45.
- 川上寛子・綿貫攻・原光二郎・小峰正史・黒木秀一・岩切勝彦・山本好和, 2015. 宮崎県日南海岸の地衣類. 宮崎県総合博物館研究紀要 (35): 41-45.
- 川上寛子・綿貫 攻・原光二郎・小峰正史・黒木秀一・岩切勝彦・山本好和, 2016. 宮崎県宮崎市加江田溪谷の地衣類. 宮崎県総合博物館研究紀要 (36): 55-59.
- 小峰正史・川上寛子・原光二郎・黒木秀一・山本好和, 2012. 分布資料 (32). フクレヘラゴケ *Thysanothecium scutellatum* の宮崎県内の新産地. Lichenology 10: 179-180.
- 大村嘉人・黒木秀一, 2004. 霧島山の地衣類. In 宮崎県総合博物館総合調査報告書「霧島山の動植物」, pp. 203-212. 宮崎県総合博物館, 宮崎.
- 山本好和・原光二郎・小峰正史・黒木秀一・岩切勝彦・山本好和, 2016. 宮崎県尾鈴山の地衣類. 宮崎県総合博物館研究紀要 (36): 51-54.
- 山本好和, 2008. 都道府県別地衣類チェックリスト(3). 九州地方. Lichenology 7: 37-102.
- 山本好和・原光二郎・小峰正史・川上寛子・溝口恵敬・山東智紀, 2010. 紀伊半島産の興味ある地衣類Ⅰ. 南紀生物 52: 1-5.
- 山本好和・溝口恵敬・黒木秀一・川上寛子・原光二郎・小峰正史, 2012. 紀伊半島産の興味ある地衣類Ⅴ. 南紀生物 54: 116-119.
- 吉村庸, 1974. 原色日本地衣植物図鑑, Plate 2. 保育社. 大阪.
- (調査協力者)
川上寛子、小峰正史、原光二郎、山本好和、綿貫攻

(6) 菌類

1. 変更

ランクが変更となった種として DD だったトラフタケキンが再発見され、CR-r となった。

ヤコウタケは海岸部だけでなく、照葉樹林内にも発生していることがわかり、広範囲に発生している可能性が示唆されたことから、CR-r から EN-r とランクを下げることにした。

2. 追加

照葉樹林ではアラゲカワウソタケ、シロコップタケ、オオミヤマトンビマイ、アミヒカリタケ、バカマツタケ、ビロードエノキタケ、イボコガネテングタケ、ヒメホタルタケ（仮称）、アヤヒカリタケ（仮称）、バカマツタケなどを追加した。サカズキアンズタケは2015年に新種発表となったものである。ブナ林ではエゾハリタケ、タマノウタケ、海岸クロマツ林ではハマシメジ、人里ではアカイカタケ、カゴタケなどを新たに追加している。

照葉樹林の種としては、空中湿度が高い老齢林に見られる種を中心に追加した。ブナ林や海岸クロマツ林では九州での確認例が少ない種、人里では形態に特徴があり県外でも確認例が少ない種を追加している。アヤヒカリタケやヒメホタルタケは正式に発表がなされていないが、今後の学術的な研究が進む可能性が高く、照葉樹林の象徴的な種となる可能性があることから新産種としてリストアップした。

ランクの変動はないが、生育環境が狭くなっているものとして、ヒュウガハンチクキンをはじめ、ウネミケシボウズタケは改修により確実に個体数が減少傾向にある。また、トラフタケキンやトライグチは生育環境に大きな変化はないが発生が確認できなくなっている。ムカシオオミダレタケなどのブナ林の菌類はシカの食害による乾燥化によって、発生環境がかなり狭くなった状態が継続している。なお、前回のリストで今回対象外としたものはなかった。

(参考文献)

- 日野巖・日高醇, 1950. 日向斑竹. (斑竹に関する研究・IV). 山口大農学報 1:21-28. 山口.
日野巖・日高醇, 1950. 涙斑竹. (斑竹に関する研究・V). 山口大農学報 1:29-32. 山口.
日野巖, 1951. 斑竹ニ関スル研究・II. 虎斑竹. 植物病害研究 4:107-111.
平田正一, 1984. 宮崎県植物誌. 宮崎日日新聞社. 宮崎.
本郷次雄, 1988. 山溪カラー名鑑日本のきのこ. 山と溪谷社. 東京.
本郷次雄, 1994. 山溪フィールドブックきのこ. 山と溪谷社. 東京.
本郷次雄・幼菌の会, 2001. きのこ図鑑. 家の光協会. 東京.
本郷次雄・熊本きのこ会, 1992. 熊本のきのこ. 熊本日日新聞社. 熊本.
今関六也・本郷次雄, 1987. 原色日本新菌類図鑑 (I). 保育社. 大阪.
今関六也・本郷次雄, 1989. 原色日本新菌類図鑑 (II). 保育社. 大阪.
今関六也他, 1988. 日本のきのこ. 山と溪谷社. 東京.
今関六也・本郷次雄, 1973. カラー自然ガイドきのこ. 保育社. 大阪.
今関六也・大谷吉雄・本郷次雄, 1998. 日本のきのこ. 山と溪谷社. 東京.
勝本謙・黒木秀一, 2002. 宮崎県の稀産斑竹2種宮崎県総合博物館研究紀要 24:56-61. 宮崎.
黒木秀一・長尾秀幸・清田悦司, 2002. 絶滅危惧菌類「キリノミタケ」の発生状況とその環境調査. 宮崎県総合博物館研究紀要 23:23-45. 宮崎.
黒木秀一・内山茂, 2003. 日本新産・オオゴキブリから発生した冬虫夏草. 宮崎県総合博物館研究紀要 24:47-55. 宮崎.
黒木秀一, 2004. 霧島山のきのこ. 総合調査報告書「霧島山の動植物」. 宮崎県総合博物館総合調査報告書:213-240. 宮崎.
黒木秀一・服部真由美・服部力, 2004. 宮崎県産「シイノトモシビタケ」. 宮崎県総合博物館研究紀要 25:26-42. 宮崎.
黒木秀一・佐藤博俊, 2006. 日本新産種「トライグチ」発生地の環境調査. 宮崎県総合博物館研究紀要 27:17-28. 宮崎.
黒木秀一・長尾秀幸・清田悦司, 2007. 絶滅危惧菌類「キリノミタケ」の経年発生調査. 宮崎県総合博物館研究紀要 28:7-40. 宮崎.

- 黒木秀一, 2008. ショウロ栽培の新しい可能性?. 千葉菌類談話会通信 24 号: 62-64. 千葉.
- 黒木秀一, 2008. 行徳山照葉樹林のきのこ. 宮崎県総合博物館総合調査報告書「県北地域調査報告書」131-148. 宮崎.
- 黒木秀一, 2009. 賀来飛霞標本コレクションに含まれていた絶滅菌類「日向斑竹」について. 宮崎県総合博物館研究紀要 29:51-56. 宮崎.
- 黒木秀一・崎田一郎, 2010. 宮崎平野における海岸クロマツ林のきのこ民俗. 宮崎県総合博物館研究紀要 30:103-114. 宮崎.
- 黒木秀一, 2011. 宮崎県のきのこ方言と民俗. 宮崎県立図書館宮崎県文化講座研究紀要第 37 集 69-92. 宮崎.
- 環境省自然動物局野生生物課希少種保全推進室, 2015. レッドデータブック 2014—日本の絶滅の恐れのある野生生物 9 植物Ⅱ. ぎょうせい. 東京.
(調査協力者)
須原弘登 宮崎県木材利用技術センター

(7) 植物群落

1. 変更

記載事項の変更にはカテゴリーの概要の部分と、群落リストの部分とがある。

○カテゴリーの概要分野

「表 1 植物群落の重要度」の元データとなる「植物群落(群)の重要度評価基準」の中に示されている具体的群落の例の表記の一部が変更された。この変更理由は、植物群落の具体例として適当でない事例の他、よりイメージしやすい群落名の表記に改めたためである。

もう一つは、「表 3 群系の危機レベル(度)」の 3 点の項に属する群系に「火山荒原」が追加された。それによって群系の危機レベル点に属する群系が 16 群系となった。この変更理由は「記載漏れ」である。

○群落リストの分野では、追加群落の他、群落名の記載表記見直しと整理、群落を取り巻く状況変化による 3 本の評価軸の各項目評価ランク付け (数字) 変更である。

変更理由

- ・追加群落では、新たに特徴的な生態的立地に成立する典型的群落に記載された。
- ・群落名の記載表記の見直しと整理では、同じ内容の群落なのに優占種名区分だったり、群集名区分だったり、整理されないまま表記されていたものや、群落名の間違い等を整理した。また、特定種の採取の危険が高い群落を除き、群落位置をより理解し易くするよう地域名を入れた。
- ・群落環境及び群落を取り巻く環境改変による評価基準ランク (数字) 改訂で最も多い変更の原因がシカの食害被害の群落である。
- ・一部であるが地名変更に伴う変更がある。
- ・二次的植生と見られる群落の場所特定が現在できない 2 箇所はリストから削除された。
- ・土地利用による破壊で消滅あるいは壊滅状態となった群落評価が変更された。
- ・ヒュウガホシクサ群落のように壊滅からの変更もある。

2. 追加

- ・新たに確認された生態的立地に成立する典型的群落に記載された。
- ・都井岬のソテツ群落 (国指定特別天然記念物) のような重大な記載洩れもある。
- ・家田湿地の表記では川坂湿地が隠れてしまうとの声から分離独立して表記した。

・その他、誤字等が修正された。

(調査協力者)

河野 円樹	綾町役場
河野樹一郎	西日本技術開発株式会社
南谷 忠志	宮崎植物研究会
成迫平五郎	宮崎植物研究会
赤木 康	宮崎植物研究会

(8) 哺乳類

2012 年度の環境省レッドリストから、それまでは絶滅の恐れのある地域個体群 (LP) として掲載されていた「九州地方のツキノワグマ」が、削除された (環境省, 2012; 森林総合研究所, 2010)。すでに、2000 年度宮崎県版レッドリストより、ツキノワグマは絶滅 (EX) として掲載されていたので、環境省のこの見直し結果を、今回の宮崎県版レッドリスト改訂で反映させる必要はない。

ニホンカワウソについては、上記環境省の見直しにおいても CR から EX へと変更された。宮崎県内でもまったくその後の新たな情報もないので、EX のカテゴリーから変更の必要はない。

これまで、ニホンカモシカは宮崎県版レッドリストでは「その他保護上重要な種」に選定されていたが、2011～2012 年度の九州地区カモシカ特別調査において、2002～2003 年度調査からの厳しい生息状況は変わらないと判断されたこと、また現在の生息地が従来のコア生息地域集中型ではなく周辺地域分散型の分布に代わっており生息個体群の小集団化が懸念されていることから、NT に格上げすることとした (大分・熊本・宮崎県教育委員会, 2013)。なお、この特別調査報告書では、この状況を生んだ主たる要因としてニホンジカの増加による下層植生の破壊を指摘している。

ヒナコウモリについては、2012 年度と 2013 年度に音声で、また 2015 年度には捕獲で確認されたので、EN として新たに掲載することとした。ノレンコウモリについては 2013 年度と 2015 年度の調査において個体数が少ないながらも比較的安定した個体群が複数個所で発見されたことにより、EN から VU に変更された。また、クロホオヒゲコウモリは、環境省基準では VU であるが、本州よりもさらに生息域は限られ、個体数も極めて少ないのでランクを上げて CR とした。本種は 2013 年度と 2014 年度の調査で確認されている。

カワネズミ、ニホンモモンガ、ムササビ、ヤマネ、カヤネズミともに安定して各年度の調査で生息確認が行われているため、それぞれカテゴリーの変更はない。ヒミズ sp. として 2013 年度に報告された個体については、目撃されただけであり種の判定が不可能であるので、ヒメヒミズであるかどうかの判定はできない。スミスネズミは 2014 年度の調査において大崩山で 1 個体捕獲されているだけで、カテゴリーの変更のための材料はない。

以上より、哺乳類の今回の見直しでは、ノレンコウモリ (EN→VU)、ヒナコウモリ (EN として追加)、クロホオヒゲコウモリ (NT→CR)、ニホンカモシカ (OT-1→NT) のみの変更とする。

(参考文献)

環境省, 2012. 第 4 次レッドリストの公表について (お知らせ) .

<https://www.env.go.jp/press/15619.html>.

森林総合研究所, 2010. 九州で最後に捕獲されたツキノワグマは本州由来であった. 森林総

合研究所プレスリリース、
大分・熊本・宮崎県教育委員会，2013. 平成 23・24 年度九州山地カモシカ特別調査報告書。
(調査協力者)

森田哲夫 宮崎大学農学部
船越公威 鹿児島国際大学国際文化学部
中村 豊 宮崎野生動物研究会
岩切康二 宮崎野生動物研究会
福島英樹 宮崎野生動物研究会
やまんが保全チーム (宮崎大学学生)

(9) 鳥類

2011 年度から 2014 年度までの野生動植物生息状況調査や、鳥情報および個人情報データベースを参考資料とし、絶滅危惧 IB 類 (EN) を 11 種と判定し、2011 年のリストと比較するとミゾゴイ、カンムリウミスズメ (中村, 2011)、ブッポウソウ (中村, 2014)、ヤイロチョウ、ウチヤマセンニュウ (山口他, 2003)、コアジサシの 6 種は現状のままとし、渡来数が徐々に増加傾向にあるツクシガモを EN から、環境省と同じ判定の絶滅危惧 II 類

(VU) へと降格し、繁殖環境の悪化や渡来数激減などの原因により準絶滅危惧 (NT) からヨタカを、VU からチュウヒやコノハズク、コマドリ、ウズラをランクアップさせた。ヨタカは急激に確認数が減少していることから重要度も A とし、もともと記録の少ないコノハズクを B とした。

VU は 15 種と判定し、11 種 (トモエガモ、カラスバト (中村・児玉, 2001)、ヨシゴイ、ハウロクシギ、ツバメチドリ、ズグロカモメ、ハイイロチュウヒ、ホシガラス、クマタカ、フクロウ、アオバズク (中村, 2015)) を現状のまま残し、繁殖状況が不明であるハチクマと、九州唯一の繁殖記録および繁殖地南限でもあり (中村・稲田, 2005)、繁殖期の生息確認もあるルリビタキの 2 種を再評価した結果情報不足 (DD) と判定しランクダウンした。環境の悪化や個体数の減少などの評価に基づいて NT からトラツグミとシロチドリの 2 種をランクアップし、そして新たに、渡来数の減少や環境省の評価基準に準じて、ツルシギ 1 種を追加した。さらに上位から降格した 1 種を追加した。重要度も NT からランクアップしたトラツグミとシロチドリは A とした。

次に NT は 27 種と判定した。これは種数からすると前回のリストと同じ種数となった。内容は、21 種 (クロサギ、クイナ、ジュウイチ、ツツドリ、セイタカシギ、タマシギ、ツミ、ハイタカ、オオタカ、コミミズク、アカショウビン、ハヤブサ、アカヤマドリ、コシジロヤマドリ (中村他, 2015)、ヒクイナ、カッコウ、サンバ (日本野鳥の会, 1989)、サンコウチョウ、コシアカツバメ、キビタキ、オオルリ) を現状のまま引き継ぎ、コサメビタキは繁殖確認が乏しく、以前に比べると減少していることは間違いないが、再評価した結果 DD と判定しランクダウンした。またランクアップを再評価した結果、ヨタカを EN に、トラツグミとシロチドリを VU へと判定した。さらにイカルチドリ、オオソリハシシギ、アカアシシギ、タカブシギ、センダイムシクイ、オオアカゲラの 6 種を生息地や繁殖地の悪化により減少傾向にあるとして追加種とした。環境の悪化により生息数の減少が危惧されるタマシギとサンバについては、カテゴリーをランクアップしなかったが重要度は A とした。

DD は前回リストより 4 種多い 12 種を判定した。オシドリ、アナドリ (中村他, 1999)、

ヘラサギ、オオコノハズク（中村・末吉，2010）、メボソムシクイ、キバシリ、クロツグミ、コジュリンの8種は現状維持とし、VUから降格したハチクマとルリビタキ、NTから降格したコサメビタキの3種を追加し、五ヶ所高原やえびの高原で少数が繁殖している可能性があるシマアカモズを追加種とした。ルリビタキはランクダウンしたが、九州で唯一の周年生息地であり、日本の繁殖地南限に変わりはないので重要度はAとした。

その他保護上重要な種（OT）は2種（オオミズナギドリ、ホオアカ）をそのまま現状維持とした。前回、NTであったミサゴとオジロトウネンの2種を、生息数の増加と繁殖期に若い個体の生息確認が増加していること、顕著な減少は見られず、旅鳥として一定の個体数が記録される種ではなく評価できないためランク外と判定し、削除した。

（参考文献）

2011年度から2015年度までの野生動植物生息状況調査報告書。

中村豊・児玉純一，2001. 宮崎県の枇榔島と小枇榔におけるカラスバト *Columba janthina janthina* の地上営巣例. 日本鳥学会誌 Vol. 50: 37-41.

中村豊・稲田菊雄，2005. 九州祖母山系障子岳におけるルリビタキの繁殖初確認. Strix Vol. 23: 153-158.

日本野鳥の会愛媛県支部・高知県支部・大分県支部・宮崎県支部，1989. 四国から九州に渡るサシバの渡りルート. Strix Vol. 8: 125-131.

山口恭弘・菊池博・亀谷辰朗・山口香子・上野信一郎，2003. 宮崎県日向市細島におけるウチヤマセンニュー *Locustella pleskei* の捕獲記録. 日本鳥学会誌 Vol. 52: 119-121.

中村豊・末吉豊文，2010. 宮崎県におけるオオコノハズクの繁殖確認. 宮崎県総合博物館研究紀要 (30) : 11-14.

中村豊・児玉純一・井上伸之・岩崎郁雄・岩切久，1999. 宮崎県におけるアナドリの繁殖初確認. 日本鳥学会誌 Vol. 47: 145-147.

中村豊・井上伸之・福島英樹，2015. みやざきの野鳥図鑑. 鉾脈社. 宮崎.

中村豊，2011. 日本の海鳥研究最前線・宮崎県枇榔島におけるカンムリウミスズメの生態. 海洋と生物 (194) : 233-238.

中村豊，2015. 防鳥ネットアオバズク救出. 野鳥だよりみやざき No. 247: 9-10.

中村豊，2014. 宮崎県のブッポウソウ. 幻の青い鳥ブッポウソウ. 倉敷市立自然史博物館. 岡山.

（調査協力者）

稲田菊雄	日本野鳥の会宮崎県支部
岩切久	日本野鳥の会宮崎県支部
井上伸之	日本野鳥の会宮崎県支部
前田幹雄	日本野鳥の会宮崎県支部
中原聡	日本野鳥の会宮崎県支部
上谷川則男	日本鳥学会・日本野鳥の会宮崎県支部
弥永俊雄	日本野鳥の会宮崎県支部

（10）爬虫類・両生類

2011～2015年の現地調査、聞き取り調査、情報提供等により、爬虫類・両生類に関するデータは168件を収集できた。また、1998～2010年までの現地調査、情報提供による772件のデータの整理を行い合計940件のデータをもとに、RLの変更について検討を行った。

2011～2015年において、県内で爬虫類・両生類の生息する環境が大きく変化すると認識されるものは、山間地の林床の変化がある。変化の様子を数量的に表すデータはないが、

調査個所の多くにおいて、ニホンジカの食害による下草の消失が見られ、林床の乾燥化とそれに伴う河川の源流部とそれに続く沢への土砂の流入を確認できた。2011～2015年の調査では、山間地に所在する調査場所の爬虫類・両生類の量的変化を把握することはできないが、林床の乾燥化はそこに生息する両生類の減少の原因となり、その両生類を捕食する爬虫類の減少につながると推測される。また源流部やそれに続く沢への土砂の流入は、そこを産卵及び幼生の生育場所としている両生類の生息に影響を及ぼすと推測される。ただし、この山間地の林床の変化を原因としてRLの変更を今回は行っていない。

今回RLの変更は3件である。1件目は情報不足とされていたニホンヤモリが、現地調査及び情報提供により県内各地に生息し、生息数も多いことが判明し、絶滅の危機はないと判断され、今回の改訂ではリストから削除した。2件目は情報不足とされていたコガタブチサンショウウオについては、現地調査及び情報提供により、県内における生息地は限られていることが判明した。また、生息環境は森林伐採などにより大きく変化することを勘案し、本種の生息は危機的状況と判断し、今回の改訂では絶滅危惧Ⅱ類へカテゴリーを変更した。3件目は九州に生息するオオダイガハラサンショウウオについては、2014年に3種に分けられ（ソボサンショウウオ、アマクササンショウウオ、オオスミサンショウウオ）新種記載された。これにより、本県と大分県境となる大崩、祖母、傾山系に生息するオオダイガハラサンショウウオはソボサンショウウオに分類されたため、RLの記載種をオオダイガハラサンショウウオからソボサンショウウオに変更した。なお、絶滅の危険性についての変更はないが、種の固有性という観点ではその重要性が増すことになった。

RLの変更は行っていないが、クサガメについては近年の研究により江戸時代に大陸から国内に持ち込まれ、定着した外来種であることが示されている。今後、研究の進展によって対象種から削除される可能性もあるが、日本に定着して100年以上を経過していることを勘案し、今回の改訂では前回と同様に絶滅危惧Ⅱ類とした。

(参考文献)

KANTO NISHIKAWA & MASAFUMI MATSUI, 2014. Three new species of the salamander genus *Hynobius* (Amphibia, Urodela, Hynobiidae) from Kyushu, Japan. *Zootaxa* 3852 (2): 203-226.

宮崎県, 2011. 宮崎県の保護上重要な野生生物 2010年度版. [爬虫類・両生類].

(調査協力者)

岩切康二 宮崎野生動物研究会

(情報提供者)

西 邦雄 宮崎野生動物研究会

笹岡康則 宮崎昆虫同好会

日高謙次 宮崎昆虫同好会

(11) 魚類

2010年度版から現在では、ウナギがニホンウナギに改名することが提案され、このニホンウナギが、IUCNより絶滅危惧種(EN)に指定された。環境省でも同時に同様の扱いとされた。2015年には、オオヨドシマドジョウ *Cobitis sakahoko* Nakajima & Suzawa, 2015の新種報告がなされて、環境省により同時に絶滅危惧種EN(宮崎県EN-rと判断)に指定された。更に最近タイリクシマドジョウ(赤崎, 1995. みやざきの自然第11号)とされていたものの中に、上記新種を含む在来2種を含む3種が含まれ、ヤマトシマドジョウも含ま

れ、混同されていたことが判明し、環境省と同じく絶滅危惧Ⅱ類VU（宮崎県VU-r）と判断すべきと判断した（中島私信，2016）。メダカも日本には2種いることが報告され、宮崎産はミナミメダカに改名された。宮崎県区分では、VU-gとしていたが、宮崎市・延岡市周辺の主要な生息地が絶滅・壊滅状態になったことから、宮崎県区分は、CR-rと判定した。ため池を除いて、田んぼの周りの水路はほぼ絶滅してしまった。極めて危険な状態である。ドロクイの2個体目が門川湾より採集されたが、極めて絶滅が危惧される。福島川のヤマメは、従来知られていない遺伝系統で日本最南限個体群であると魚類学会で口頭発表がなされたが、実際の論文はまだ出ていないので、保留とした。同様に祖母山大谷川水系のイワナは、自然分布の可能性はあるが、中国地方のゴギに近い可能性はある可能性が出てきたが、決着はついていない。アカメは、2006年には、本県が捕獲などを禁止した。禁止後9年経って、良い方向に向かっているのか、日南海岸の定置網や諸河川でも採集の報告が2000年初頭ほぼ全く無かったが、ここ数年は多くはないが捕獲の例が聞かれるようになった。東海地方や東京湾でも捕獲例があり、温暖化の影響か、分布の北上があるように思えるが、判定の変更は時期尚早と判断した。

（参考文献）

- Nakajima, J., Suzawa, Y. , 2015. *Cobitis sakahoko*, a new species of spined loach (Cypriniformes: Cobitidae) from southern Kyushu Island, Japan. *Ichthyological Research*. Volume 63, Issue 1, pp68-78.
- 中島淳・中村朋史・洲澤謙, 2011. 宮崎県大淀川水系から得られた特異なシマドジョウ属. *魚類学雑誌*, 58: 153-160.
- 北川えみ・中島淳・星野和夫・北川忠生, 2009. 九州北東部におけるシマドジョウ属魚類の分布パターンとその成立過程に関する考察. *魚類学雑誌*, 56: 7-19.
- 赤崎正人, 1995. 宮崎県海と川の魚介類（九）宮崎県の河川の魚（5）. *みやざきの自然* 11号

（12）昆虫類

○ 2011～2015年調査において変化したこと

これまで、県内の昆虫類では認知されていなかったが、調査期間において草原性の昆虫類が急速にニホンジカ等の食害に大きな影響を受けはじめていることが判明した。特に食草や吸蜜・訪花植物に依存している種が該当し、2011～2014年に県北の五ヶ所高原で行ったチョウ類の現状調査においては、この4年間だけで、生活のほとんど及び一部が草原に関係している種（草原性とする）の約半数が減少している。そのほかの草原性昆虫類も減少していることが認められ、由々しき事態となっている。

また、森林の下草や低木を利用している森林性昆虫類も減少している可能性は高く、ヒメキマダラヒカゲにおいては、食草のスズタケの消滅により、全くなくなった地域もあるが、全体的に調査不足は否めない。

河川や湿地・溜池等に生息する水生昆虫類は減少が続き、全体的に厳しい状況が続いている。原因は改修、改変、農薬汚染や周囲の環境の変化が考えられ、小型種のゲンゴロウ類やミズスマシ類全般、トンボ類の一部などがその影響を受けている。しかしながら、限られた場所では水質の改善があると思われ、農薬に脆弱なタガメが毎年諸処で発見されるなどの事例がある。

一方、海岸では、砂浜において浸食がさらに進行し、国土保全のための護岸工事も進み、

砂浜に生息している種の減少が加速している。その種の中にはハンミョウ類を代表とする甲虫類や砂浜草地に依存するバッタ類、カメムシ類等が挙げられる。

○ 特徴的な種

ゴマシジミは、昨年同様、減少が著しく、唯一の生息地である五ヶ所高原であり、ネットを張るなどの保護策を行っているが、現状では厳しい状況が続いている。シカ等の食害の影響のほかに、本年度はアリとの関係を調査しているが、思うような結果は得られておらず、今後とも調査を続ける必要がある。ヒメシロチョウは、ゴマシジミ同様、個体数の増加は見られないが、発生地において、産卵および複数の卵を確認することが出来た。しかしながら、個体数も少なく、絶滅の危険性は依然として続いている。ウラギンスジヒョウモンは、九州、四国では絶滅あるいは、絶滅に近い種である。県内でも数年、確かな記録がない。原因のひとつとして、シカの食害による吸蜜植物の急減が考えられる。

以上の種のほかチョウ類では、シカの食害による減少と考えられる種が増加している。オオウラギンヒョウモン、ヒメキマダラヒカゲ、ウラギンヒョウモン（ヤマ型、サト型）、ホシミスジ、スジグロチャバネセセリ、ヘリグロチャバネセセリ、ハチ類ではオオマルハナバチ、クロマルハナバチ、バッタ類では、ムサシセモンササキリモドキ、クロダケササキリモドキ、ガ類では、ヒメスズメほか多数該当する種があると思われる。

水生昆虫類では、最普通種であったシャープツブゲンゴロウの個体数が激減し、マルケシゲンゴロウ、チンメルマンセスジゲンゴロウなども記録出来なかった。また、1980年以前において、ヒメミズスマシやオオミズスマシなどのミズスマシ類は、身近な種であったが、現状では極限られた場所に細々と生息しているに過ぎない。

○ 絶滅および絶滅の可能性のある種

スジボソヤマキチョウは、1953年の記録を最後に確実な採集記録はなく、それから、60年以上が経過し、現時点では絶滅した可能性が高いと判断した。

また、ゴイシツバメシジミ、ベッコウトンボは、調査期間中にも情報は全くなく、極めて絶滅の危惧されている種である。

○ 5年間に県内で初めて発見されたRL該当種（報告分を含む）

ガ類：ミヤタツマトビキエダシヤク（2015年、新種希少）、アシナガモモブトスカシバ（2015年、環境省：VU）、フタスジギンエダシヤク（2011年、希少）、キバラヒトリ（2011年、希少）、ニセタバコガ（2015年、希少）

カメムシ類：ニシキキンカメムシ（2015年、南限、希少）

甲虫類：ヒラズゲンセイ（2011年、希少）、ツヤハマベエンマムシ（2015年、希少）

ハチ類：ニッポンハナダカバチ（2015年報告、希少）、フジジカバチ（2015年報告、希少）

以上の10種が挙げられ、いずれも種の特徴からレッドデータ種となり得るものである。

（参考文献）

日本直翅学会編，2006．バッタ・コオロギ・キリギリス図鑑．

林正美・税所康正，2011．日本産セミ科図鑑．

日本昆虫目録編集委員会，2013．日本昆虫目録第7巻 鱗翅目 第1号．

岸田泰則ほか，2011-2013．日本産蛾類標準図鑑 I～IV．

尾崎・川島・二橋，2012．日本のトンボ．

森正人・北山昭，2002．改訂版図説日本のゲンゴロウ．

平嶋・森本監修，2008. 新訂原色昆虫圖鑑Ⅲ.
井上・中島，2009. 福岡県の水生昆虫図鑑.
木野田・高見沢・伊藤，2013. 日本産マルハナバチ図鑑.
石川・高井・安永，2012. 日本原色カメムシ図鑑第3巻.
大桃・福富，2013. 日本産タマムシ大図鑑.
芦田久，2007. ハンミョウの分類. 昆虫と自然 42 (8).
井村・水沢，2013. 日本産オサムシ図説.

(調査協力者)

新開 孝	宮崎昆虫調査研究会
河野太祐	九州大学大学院
怒和貞賞	元宮崎蝶類愛好会主宰
八木真紀子	宮崎昆虫調査研究会
永井 彪	日本蛾類学会
山根正気	日本昆虫学会
今坂正一	日本昆虫学会
笹岡康則	宮崎昆虫同好会

(13) クモ類

2000 年版では環境省 RL の 1 属 3 種 (キムラグモ、キシノウエトタテグモ、キノボリトタテグモ、ワスレナグモ) の掲載であった。2010 年度版で検討できなかったのも、今回、2011 年度から 5 年間の調査で、次の 6 種を追加し、掲載することとした。主な追加理由は以下のとおりである。

(1) ドウシグモ (DD-1)

環境省 RL において DD であり、隣県の RDB (熊本県、長崎県、大分県) で DD と掲載されている。鹿児島県では離島でのみ確認されている。また、過去に県内で確認されているが、現存しているかどうか判断できない。社寺林の環境の変化や天敵による捕食で減少したと考えられる。

(2) ヤマトウシオグモ (DD-1)

環境省 RL において DD であり、隣県の RDB (熊本県、長崎県) で DD と掲載されている。海岸部を生息域とするが、護岸工事や埋立てなどにより生息環境の減少がみられ、現存しているかどうか判断できない。

(3) ヤマトヤギヌماغモ (DD-2)

今回、県内の山地において、九州で初めて確認されたが、情報不足である。東京都の RL では DD として掲載されている。

(4) ヤギヌマフクログモ (DD-2)

今回、県内の開けた山地において、九州で初めて確認されたが、情報不足である。名古屋市の RL では VU として掲載されている。

(5) ホウシグモ (DD-2)

日本で初めて岸田久吉により高原町で採集され、今回も御池で確認された。九州 (南部)・四国での確認のみなので、極めて情報不足である。

(6) ワクドツキジグモ (DD-2)

日本で初めて宮崎県の築地満男により門川町で採集され、今回、串間市で確認された。愛知県の RL では EN と掲載されている。採集記録が極めて少なく、情報不足である。

(参考文献)

- 小野展嗣, 2009. 日本産クモ類検索図鑑.
新海栄一, 2010. ネイチャーガイド日本のクモ (第2版).
環境省, 2014. RDB2014, 7 その他無脊椎動物.
千国安之輔, 2008. 写真日本クモ類大図鑑 (改訂版).
八木沼健夫, 1986, 1999. 原色日本クモ類図鑑.
鹿児島県, 2003. 鹿児島県の絶滅のおそれのある野生動植物.
宮崎県, 2000. 宮崎県の保護上重要な野生生物.
石野田辰夫, 1992. 宮崎のクモ, 宮崎県の生物. pp309-318.

(調査協力者)

西 邦雄	宮崎野生動物研究会
小野展嗣	国立科学博物館
黒木秀一	宮崎県文化財課
石野田辰夫	宮崎昆虫同好会
河野 宰	宮崎昆虫同好会
八木真紀子	宮崎昆虫同好会
村井健二	宮崎昆虫同好会
安本潤一	宮崎昆虫同好会
木野田毅	宮崎昆虫同好会
岩崎郁雄	宮崎昆虫同好会
山田真太郎	宮崎昆虫同好会

(14) 甲殻類

宮崎県RL「甲殻類」に関する変更・追加は、その主要な変更理由が、2012年の環境省RLに関する「その他無脊椎動物に関する変更」および2012年の日本ベントス学会発行の「干潟の絶滅危惧動物図鑑」による甲殻類全体の見直しに負うところが大きく、宮崎県 2010年発行のRDB以来、2015年11月現在までの宮崎県内での野外調査等を踏まえた結果をまとめたものである。甲殻類は日本国内だけでも7000~8000種が生息し、県内にもその10%以上は出現するものと考えている。淡水・汽水・海洋などが主な生息地で、陸産種は多くない。宮崎県内では、河川・海岸の護岸工事など人為的改変の影響ばかりでなく、陸域で散布される薬剤に過敏で、すでに絶滅してしまった甲殻類も少なくないと思われる。

1. 変更

「一ツ葉入り江のヒメシオマネキ」として、OT-2 にランクしていたが、本種と形態のよく似たホンコンシオマネキ *Uca borealis* Crane, 1975 であることが、遺伝子分析の結果明らかになった。また、一ツ葉の個体群が2013-14年の冬以降は確認できなくなっている。ヒメシオマネキ *Uca vocans* (Linnaeus, 1758) であれば北限の種子島が宮崎まで伸びることになるが、ホンコンシオマネキであるとする、北限の台湾との距離が大きく、人為的な移動（バラスト水などへの幼生の混入等）の可能性が高く、学術的には興味深い。RLの対象としてはふさわしくない可能性もある。また、宮崎県内では確認できなくなったこともあるので、リストからは除外することとした。

2. 追加

宮崎県の汽水域で確認できた甲殻類は2010年時点で、112種であったが、その後も確認種数は増加しており、現在蟹類を中心に標本を再整理しているところである。その中には、全国レベルで絶滅が危惧されつつある種も多く含まれ、今回、21種を追加することとした。

宮崎県区分でVU-rにランクされる甲殻類2種が追加された。カネココブシは全国レベルでも絶滅が心配され、DDとしてランクされているが、宮崎県内に健全な生息地が見つかっている。ただし、確認されているのは未だ1地点だけであり、今後の継続的な観察が必要

である。ピンノヤドリムシは干潟の二枚貝外套腔に寄生するフタハピンノの鰓腔内部に超寄生する甲殻類であり、有明海以外での記録は乏しく、寄主も宮崎県ではVU-rにランクされているので、同等の扱いとした。

NT-rとして6種を追加した。トミオカカリアプセウデスは県内でも希少なアマモ場に生息する甲殻類で、原記載地の天草以外では唯一の生息確認地が宮崎県となる。また、本種はタナイス類の中でも特異な糸を分泌する生理・生態が注目されており、材料を探していた北大研究者に情報提供したところ、国際的な雑誌にその知見が報告された (Kakui, K. & Hiruta C. 2014)。アマモ場の近傍からはヒメアカイソガニが記録された (三浦ほか, 2012)。アマモなどが見られる内湾域の海岸は県内では希な環境であり、上の種と同等にリストした。また、さらに希少なヒメアカイソモドキも見ついているが、極めて希な種で、国内でも記録が少なく、詳細な分類研究も必要なため、DD-2としてランクした。甲殻類の調査が進んでいく中で、干潟や海岸では甲殻類に寄生するヤドリムシ類も確認され (三浦ほか, 2014)、特定の場所では生息が確認できるので、2種スナモグリヤドリムシおよびスナモグリノエラヤドリをリストした。宮崎県の干潟あるいは河川からはテナガエビ類が採集され、(だくまえび)として食用に供されるが、その主要な部分はミナミテナガエビであり、他2種が混獲される。ミナミテナガエビ以外は宮崎県がその分布域の端にあたると思われる、生息数が少なく、記録される数も減少していると思われるので、新たにリストした。テナガエビは分布の南限付近にあたり、減少傾向にあると思われる。ヒラテナガエビは生息数が限られ、やはり減少傾向にあると思われる。両種とも宮崎市内の小河川で地域住民の環境調査に出現することがあり、今後も調査を続けていただくこともふまえて、リストした (三浦, 2008; 渡邊・狩野, 2008)。

絶滅傾向にある一般的な汽水域甲殻類として12種を新たに追加した。コブシガニモドキは希少なアマモ場に生息する甲殻類で、県内1カ所で見ついている。カクレエビはアマモ場に生息する二枚貝外套腔内に寄生するエビで県内での確認は1カ所だけである。アカイソガニは海岸の転石下などに生息し、環境変化の影響を受けやすく、県内では複数の生息地が確認されているが、護岸改修などで容易に生息域が破壊されると思われる。アシハラガニは海岸や干潟などに生息し、海岸変化の影響で減少傾向にある甲殻類で、全国レベルで注目されることが多くなった。ヒメアシハラガニとハマガニもアシハラガニと同様に海岸や干潟などに生息し、海岸変化の影響で減少傾向にある。クロベンケイガニは海岸や干潟などに生息し、海岸変化の影響で減少傾向にある甲殻類の一つであるが、陸域側に入り込み、夏の雨の日などは道路などにも出てくる。臨海地の開発の影響を受けやすいため、全国的に注目されつつある。同様な甲殻類として、カクベンケイガニとフタバカクガニをリストした。他に干潟に数多く出現し、ごく普通に見られる甲殻類でありながら、海岸や干潟などに生息し、海岸変化の影響で減少傾向にある甲殻類として、コメツキガニとチゴガニをリストした。これらはハクセンシオマネキなどと同様に全国的にも注目されているカニ類である。宮崎県内の純淡水産カニ類として記録されるサワガニは河川の上流域に生息する甲殻類で、清流を好み、記録も少ないが、山間部の開発や水源地の荒廃により減少傾向にあると思われる、追加することにした。

(参考文献)

Kakui, K. & Hiruta C., 2014. Diverse pereopodal secretory systems implicated in thread production in an apseudomorph tanaidacean crustacean. *Journal of Morphology*, 275: 1041-1052.

三浦知之, 2008. 「干潟の生きもの図鑑」. 南方新社, 鹿児島.

三浦知之・宇都宮美樹・北嶋雄太・富岡宏, 2014. 海産甲殻類に寄生する等脚目エビヤドリムシ上科に関する宮崎県での初めての記録 (予報). 宮崎大学農学部研究報告 60: 29-39.

- 三浦知之・三浦要・富岡宏・佐伯めぐみ・三橋利恵, 2012. 宮崎県門川長庵川アマモ場とその周辺に出現する貝類, 甲殻類および腕足類. 宮崎大学農学部研究報告 58: 51-68.
- 日本ベントス学会編, 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑-海岸ベントスのレッドデータブック. 東海大学出版会. 秦野.
- 小関祥子・富岡宏・三浦知之, 2014. 一ツ葉入江に棲息するフタハピンノの生活史について. 日本ベントス学会誌, 69: 40-50.
- Shih, H.-T., Naruse, T. & Ng, P.K.L. 2010. *Uca jocelynae* sp. nov., a new species of fiddler crab (Crustacea: Brachyura: Ocypodidae) from the Western Pacific. Zootaxa 2337: 47-62.
- 渡邊純平・狩野泰則, 2008. 宮崎県南部の2河川におけるエビ類の分布. 宮崎大学農学部研究報告 55: 25-35.

(15) 貝類

【陸産貝類】

1. キバサナギガイ 絶滅危惧Ⅱ類 (VU-r) ↑ 絶滅危惧IA類 (CR-r)
当初はキバサナギガイとヤマトキバサナギガイの区別がはっきり分からなかったが、調査が進むにつれて、見つかるのはすべてヤマトキバサナギガイであることが分かった。キバサナギガイは1997年以来18年間見つかっておらず絶滅の危険が高いことから絶滅危惧IA類に変更した。
2. ミヤザキギセル 絶滅危惧IB類 (EN-r) ↑ 絶滅危惧IA類 (CR-r)
この種は宮崎県では日之影町と大分県の日之影町と接する地域でのみ確認されていたが産地が限られており、採集圧がかかり近年減少しており絶滅の危険がより高くなっているため絶滅危惧IA類に変更した。
3. トカラコギセル 絶滅危惧IB類 (EN-r) ↑ 絶滅危惧IA類 (CR-r)
樹上性であるため見つけられやすく、採集圧がかかると絶滅する危険が大きい。宮崎県では産地が2カ所しか確認出来ておらず、個体数も減少しているため絶滅の危険が高いことから絶滅危惧IA類に変更した。
4. オオウスビロウドマイマイ 絶滅危惧IB類 (EN-r) ↑ 絶滅危惧IA類 (CR-r)
もともと希少なカタツムリである。鬱蒼とした森林にしか生息しない種である。シカによる森林の乾燥が原因とは言い切れないが、おそらく森林の乾燥化が原因だと思われるが近年さらに個体数が減少しており絶滅の危険が高いことから、絶滅危惧IA類に変更した。
5. ハナコギセル 絶滅危惧Ⅱ類 (VU-r) ↑ 絶滅危惧IA類 (CR-r)
樹上性であるため見つけられやすく、しかも人目につきやすい神社の大木などに生息することが多いので採集圧がかかると絶滅する危険が大きい。宮崎県ではすでに2つの神社で絶滅したと考えられる。近年著しく減少してきており絶滅の危険が高いことから絶滅危惧IA類に変更した。
6. ナミギセル 絶滅危惧IA類 (CR-g) ↓ 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)
全国的には普通種であるが、宮崎県では1カ所でのみ確認で、しかも生息環境が不安定な場所であったので絶滅危惧IA類にしていたが、結構しぶとく生き残っていること、新たに安定した産地が見つかったことで絶滅の危険はそれほど大きくないことから絶滅危惧Ⅱ類に変更した。
7. キリシママイマイ その他保護上重要な種 (OT-1) ↓ 削除
キリシママイマイは近年の研究で普通種のタカチホマイマイと同一種とされた。その結果、環境省RDBからも削除された。タカチホマイマイと同じ種であれば保護上重要な種ではないと判断し削除した。

(参考文献)

Nishi, H. & Sota, T. , 2007. Geographical Divergence in the Japanese Land Snail *Euhadra herclotsi* Inferred from Its Molecular phylogeny and Genital Characters. *Zoological Science*, 24(5): 475-485.

(調査協力者)

齊藤政美、岩切康二、外村浩幸、串間研之、外山真樹、潮崎正浩、中馬章吾、岩崎郁雄、西浩孝

【汽水産貝類】

宮崎県RL「汽水産貝類」に関する変更・追加は、その主要な変更理由が、2014年の環境省RLに関する「貝類」および2012年の日本ベントス学会発行の「干潟の絶滅危惧動物図鑑」による貝類全体の見直しに負うところが大きく、宮崎県2010年発行のRDB以来、2015年11月現在までの宮崎県内の野外調査等を踏まえた結果をまとめたものである。宮崎県内の調査はまだ十分でなく、河川・海岸の護岸工事や農用地の水路補修の影響を直接受けるため、調査以前に絶滅している可能性も多い。さらに、近年は飼育動物や漁獲対象として持ち込まれる移入種により、在来種の生息が脅かされる危険が増大したため、保全対策の急がれる生物群である。

1. 変更

ヨコイトカケギリは、*Cingulina cingulata* (Dunker, 1860) としてVU-rにランクしていたが、当該の種が岩礁域に出現するものとは区別され、ヒガタヨコイトカケギリ *Cingulina* cf. *cingulata* (Dunker, 1860) と名称が変更されることになった。

2. 追加

宮崎県の汽水産貝類については、調査が進むとともに、確認種数は増加しているが、標本を整理しているところである。その中には、全国レベルで絶滅が危惧されつつある種も多く含まれ、今回、28種を追加することとした。

宮崎県区分でVU-rにランクされるべき貝類が6種含まれる。ウミヒメカノコと同属種3種（ウミヒメカノコ・キンランカノコ・ウミヒメカノコ同属種）はいずれも県内のアマモ場あるいはウミヒルモ場に生息し、全国的に分布も限られ、絶滅が心配されている。県内では1地点だけから記録された（三浦ほか，2012）。リシケタイラギとハボウキガイも同じ地点に生息し、宮崎県では他の産地が知られていないこと、全国レベルで減少傾向にあること、共生生物などの寄主としても重要である点で、RLに加えることにした。ヒモイカリナマコツマミガイはその寄主とともに全国的に絶滅が心配されている干潟生物で、宮崎県でも生体が得られている（梅本・三浦，2009）。環境省RL等にも記載されているので、追加した。

NT-rとして15種を追加した。その中で10種については県内での生息は確認されていたが、今回の環境省の見直しで、VUもしくはNTにランクされたものである。コメツブツララガイ・ニッポンマメアゲマキ・ミヤコドリ・サザナミツボ・カワグチツボはいずれも県内の干潟で記録され（三浦，2008）、他の水域では見つからない貝類である。護岸改修などにより減少傾向にあると考える。また、干潟のアナジャコ類に寄生するマゴコロガイも宮崎市一ツ葉入り江に生息することが確認され、全国的に生息地が減少していると考えられているので、リストに追加した。同様に、ウミナ類に付着するツボミもリストに追加した（三浦ほか，2007）。アマモ場あるいはその周辺に生息する3種、エドイトカケギリ・イボキサゴナカセクチキレモドキ・マツモトウロコガイは宮崎県内で1カ所でのみ記録されているため（三浦ほか，2012）、同様にランクした。

絶滅傾向にある一般的な汽水産貝類として6種を新たに追加した。シゲヤスイトカケギ

リ・ヌカルクチキレ・カガミガイはいずれも干潟や河口の泥質の海底に生息し、人為による環境改変を受けやすいため、全国的に減少傾向にある。シゲヤスイトカケギリの多産する宮崎市津屋原沼も津波対策の護岸工事により、大幅な改変が行われ、本種の生息地の一つが消失するかもしれない。ただ、本種に限れば、他の干潟にも出現するので、直ちに宮崎県で絶滅するという事にはならないと考える。マダラチゴトリガイとチゴトリガイはいずれも宮崎県内のアマモ場で生息が確認された（三浦ほか，2012）。国内でも生息環境などがはっきりせず、コレクターの間で売買されるようなこともあるようだが、健全な生息地が少なくとも1カ所は確認できたので、継続的な調査も必要である。アマモ場周辺の海岸に特徴的なヤマトクビキレガイも生体確認のないまま、貝殻だけの記録が多い種であったが、県内に健全な生息場所が確認された。ただし、海岸の極狭い潮位に生息するため、環境改変の影響を受けやすいので、今後とも観察が必要であろう。

ムシロガイは本来浅海域に多産する貝であるが、汽水域やアマモ場にも出現するため、干潟の希少動物として注目されているところである。リストにはDD-2として登録して、今後の調査を重ねたい。

（参考文献）

- 三浦知之，2008. 「干潟の生きもの図鑑」. 南方新社，鹿児島.
- 三浦知之・岩切真実・森岡主臣・狩野泰則，2007. 延岡市妙見湾（櫛津干潟）に出現する貝類と甲殻類. 宮崎大学農学部研究報告 53: 43-57.
- 三浦知之・三浦要・富岡宏・佐伯めぐみ・三橋利恵，2012. 宮崎県門川長庵川アマモ場とその周辺に出現する貝類，甲殻類および腕足類. 宮崎大学農学部研究報告 58: 51-68.
- 大園隆仁・三浦由佳里・三浦知之，2016. 宮崎市一ツ葉入り江におけるフトヘナタリ科貝類生息数の年変動と個体サイズの季節変動. 日本ベントス学会誌 70: 43-49.
- 日本ベントス学会編，2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑-海岸ベントスのレッドデータブック. 東海大学出版会. 秦野.